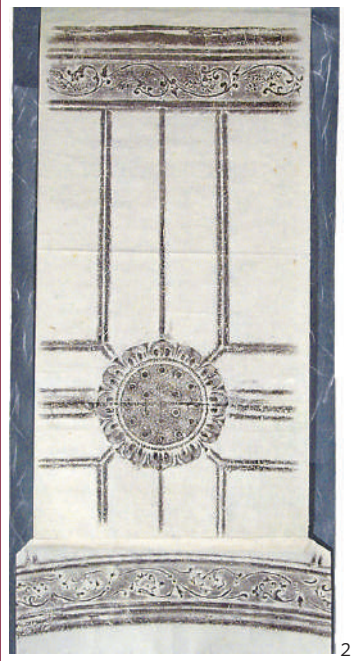




1



2



3

立正大学博物館品川キャンパス展示



4

# 梵音具

—撫石庵コレクション—



5



6



7



8

## ごあいさつ

立正大学博物館所蔵の主要な資料の一つとして、真鍋孝志氏が寄贈された「撫石庵コレクション」があります。日本における梵鐘研究の白眉である坪井良平氏に師事されて、日本のみならず世界各地の鐘を蒐集されたものです。このうち伝・橿原市出土の古代梵鐘は、小形であるとはいえ類例の少ないもので稀少価値の高いものです。真鍋氏はこの梵鐘を復元されて実際に音を発することができるようにされ、複数復元した梵鐘の一個を立正大学博物館に寄贈されています。

今回の品川校舎の企画展示では、移動可能な小形の半鐘の実物展示をおこなって、「撫石庵コレクション」の一端に触れる機会としました。本年5月には、真鍋孝志氏のご逝去されました。鐘の音に導かれて浄土に赴かれんことを祈念いたします。

平成 27 年 11 月  
立正大学博物館長 池上 悟

## 真鍋孝志と撫石庵コレクション

撫石庵ぶせきあんコレクションは、真鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）が長年蒐集されてきた梵鐘を中心とするコレクションです。平成 12 年度より立正大学学園に寄贈され、平成 14 年の立正大学博物館開館に伴い、博物館に収蔵されました。

“撫石庵”とは、真鍋氏が名付けられた号で、鐘の別称である「青石」から「石」の字を採り、「鐘をこよなく愛する庵の主人」という意味が込められています。

撫石庵コレクションには、日本の梵鐘を始め、中国・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマーなどの世界各国の鐘があります。そのため、立正大学博物館は「Oriental Bell Museum」の別名があります。

真鍋孝志氏は、昭和 5（1930）年 1 月 24 日に愛媛県宇摩郡関川町（現四国中央市土居町）で生誕されました。若い頃から病気がちであった真鍋氏は、昭和 29（1954）年の暮れに病床で聞いた鐘の音をきっかけに、梵鐘研究を始められました。

その後、昭和 38（1963）年に㈱ビジネス教育出版社を創業し、社長・会長を歴任され、平成 5（1993）年には、古鐘研究会を設立し、会長を務められました。平成 7（1995）年には、真鍋氏の功績を讃え、㈱元興寺文化財研究所より奨励賞を、平成 17（2005）年には、紺綬褒章を受けられました。平成 27（2015）年 5 月 4 日、85 歳で永眠されました。



真鍋孝志氏

## 伝・橿原市出土鐘と復元鐘

本鐘は、奈良県橿原市で出土したと伝わる鐘です（写真左）。材質は青銅で、色調は淡青灰褐色を呈しています。出土した際、鐘の縦半身が潰れてしまい、そのため全体に若干歪んでいます。龍頭は残っておらず、大きさは、遺存高 46.1cm、鐘身高 45.9cm、口径 30.2cm です。

この鐘は、形態的特徴から日本における梵鐘の初現期である平安時代前期のものと考えられ、きわめて重要な資料といえます。

写真右は、本鐘を復元した鐘です。大きさは、全高 52.2cm、口径 30.2cm で、色調は明橙茶褐色です。材質は青銅製です。

復元された鐘は 4 口あり、立正大学博物館のほかに、元興寺（奈良県）、大鐘寺古鐘博物館（中華人民共和国）、千光寺（広島県）に寄贈されています。

鐘の復元は、『撫石庵コレクション考古資料図録Ⅱ』（立正大学学園平成 13（2001）年 2 月）に掲載されている復元実測図を元に、茨城県の鋳物師小田部氏が担当されました。

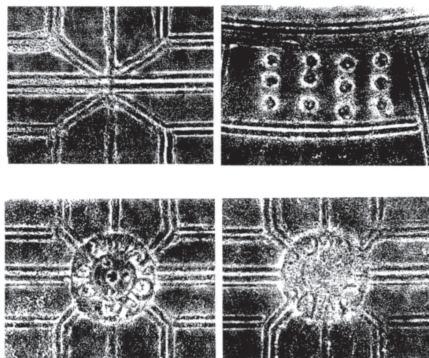
立正大学博物館に寄贈された復元鐘は、実際に鐘を撞くことができ、その鐘音を聴くことができます。



伝・橿原市出土鐘



復元された鐘



梵鐘拓影



### 用語解説①

### 梵鐘

釣鐘の一種である和鐘のことを日本では梵鐘と呼んでいます。時を知らせるためや、儀式の合図に打ち鳴らされます。梵鐘の起源は中国に求められます。日本においては、7世紀代（白鳳文化）から製作されはじめ、江戸時代になると鋳物師の統括も行われ飛躍的に製作数が増えます。しかし、多くの梵鐘は、太平洋戦争末期の金属不足のため、鋳潰されてしまいました。

また、一般に口径 1 尺 8 寸（約 54cm）以上の大型の鐘は梵鐘、それ以下の小型の鐘は半鐘と呼ばれています。

（『仏教考古学事典』参考）

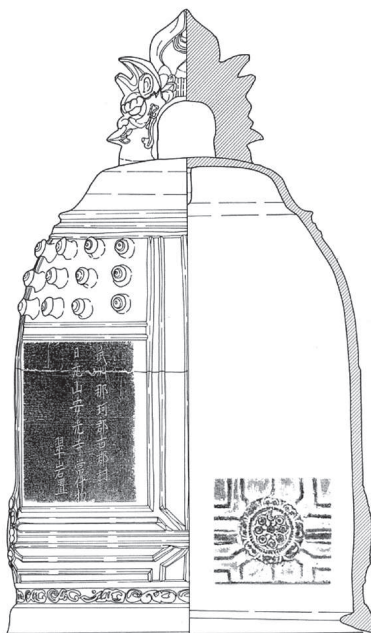
## 安光寺半鐘

大きさが全高 52.6cm、口径 30.8cm の半鐘はんしやうです。材質は青銅製で、色調は淡茶褐色です。龍頭の形は、2頭の龍を背中合わせとし、中央部に宝珠をおく一般的なものです。上帯に文様は無く、下帯に唐草文が巡らされています。口縁から 22cm 上には、鑄継ぎ痕がみられます。

銘文は「施主 江戸呉服町／谷口要助／粉川市正作」「武州那珂郡古郡村／日光山安光寺常什物／翠岩置」と、6人の被供養者の戒名が刻まれています。銘文にみられる「武州那珂郡古郡村」は、現在の埼玉県児玉郡美里町古郡の地で、日光山安光寺は現在も残っています。

安光寺には、美里町文化財指定にされている寛延元(1748)年銘の梵鐘が1口懸けられています。この梵鐘には「于時寛延元戊辰冬至日／當寺中興第一代臨濟正宗三十五世翠岩手書／鑄工 江戸神田住粉川市正／藤原宗次／武州那珂郡古郡村日光山安光寺」と鑄刻されています。この銘文から、当館所蔵の安光寺半鐘にも刻まれている「翠岩」は安光寺中興第一代住持で、「粉川市正」は江戸神田に住した鑄物師「粉川市正藤原宗次」であることがわかります。

つまり、当館所蔵の安光寺半鐘は、鑄物師「粉川市正藤原宗次」によって造られたもので、年代もおそらく美里町文化財指定の寛延元(1748)年銘の梵鐘と同時期に製作されたものと考えられます。



0 10cm



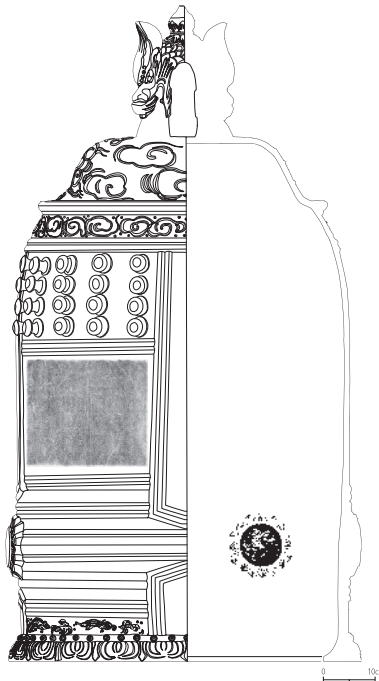
銘文拓影

## 長徳寺梵鐘

総高 123.9cm、口径 67.9cm の青銅製の梵鐘で、淡茶褐色を呈しています。

鐘身の笠形と上帯には、流雲文が全体に巡らされています。草の間には、2頭の龍と波文が陽出されており、下帯には小さな円文が巡っています。また、駒の爪には、反花が表現されています。

この鐘は、銘文より元文 3（1738）年に東奥気仙郡横田邑長徳寺の「青石鐘」として製作されたことがわかります。「東奥気仙郡横田邑」は、現在の岩手県陸前高田市横田町です。鋳物師は「大西五郎八貞清」で、宮城県仙台を中心に活躍していました。彼の作品は、仙台・林光院鐘（享保 18(1733)年）、仙台・万日堂鐘（元文 4(1739)年）、仙台・保春院鐘（元文 5(1740)年）、多賀城・宝国寺（延享 2(1745)年）にありましたが、いずれも戦時中に供出されており、この長徳寺鐘のみが現存する貴重な資料となっております。



梵鐘銘文

(第一区)  
 曩昔拘留孫佛造青石鐘掛修多羅院之中于時諸化佛出現鐘上演說十二部經聞法獲果者不可勝數矣自爾以來上天下界一切國土無以鐘不作佛事為夫德也獨孤及之文字白之銘煥然而可觀如副寶王脫刀割南唐先主解縲械不違于枚季矣玉珠山長徳禪寺需放宝鐘蓋有稔前任東嶽普叩檀門以乞助資於是諸檀信祖左肩兼淨財勳力乃命于鑄師梵鐘既成矣現住洞雲馳於專多以請於銘序隨喜而不回辭遂誌焉其

(第二区) 銘  
 鐘門要器 紀二允淑 異持淨地 竜圍默繞 天地應律 賢聖歡喜 和霜與月 無情說法 空色俱寂 晨昏有驚 金剛業体  
 脱樓云旌 以六相平 礼衆茲呈 鯨鱗半驚 品物動成 善神葵誠 隔岳徹紘 聞根澄清 圓通入聲 進止合令 般若傳明

(第三区)  
 化佛轉法 能和小大 珠山新掛 幽冥度生 扣響鏗々 永增輝榮  
 首元文三戊午林鐘吉長東嶽 白梅嶺誌 東奥気仙郡横田邑 宝珠山長徳禪寺 前任東嶽募縁

(第四区)  
 現住洞雲補化 仙台大西五郎治嫡子 大西五郎八貞清作

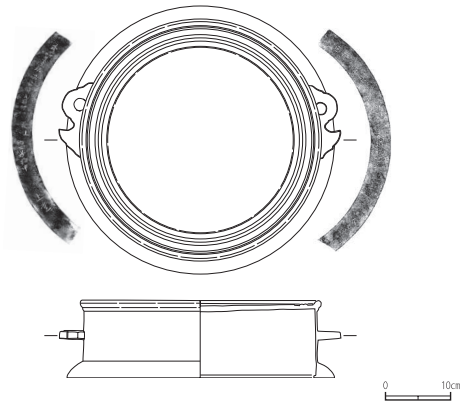
## 鉦鼓

最大径 41.3cm、高さ 11.7cm、口縁部の厚さ 3.2cm を測る青銅製の鉦鼓です。

鼓面は円形で、周縁には断面半円形の頂部に沈線を入れた二重線界線を巡らして、中央に鐘座区を設けています。体部には、鱗状の耳が 2 個つけられています。

口唇部裏面に「武芴足立郡鴻巣領元宿村 施主 惣若者中 上堂」「西村和泉守作 奉納 観世音 安永五丙申天九月吉日」という銘文が鐫刻されています。

安永 5 年は西暦 1776 年であり、足立郡鴻巣領元宿は現在の埼玉県鴻巣市本宿にあたります。西村和泉守は江戸神田住の鋳物師です。

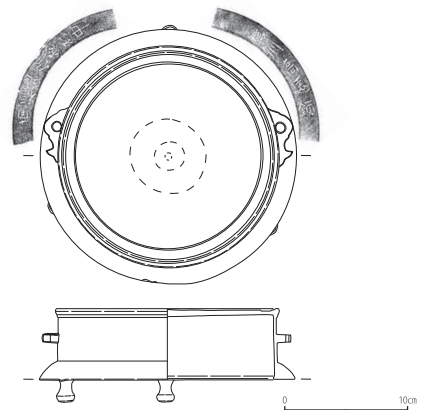


## 伏鉦

最大径 20.8cm、高さ 7.6cm、口縁部の厚さ 1.8cm の伏鉦です。青銅製で、色調は黒みがかった金色を呈しています。製作年代は不明です。

伏鉦は、鉦鼓の変形したものと考えられ、底部に 3 つの脚を持っています。鼓面は、円形で、周縁には幅 7mm の溝を巡らして、中央に鐘座区を設けています。体部には、径 8mm の孔が開けられた鱗状の耳が 2 個つけられています。

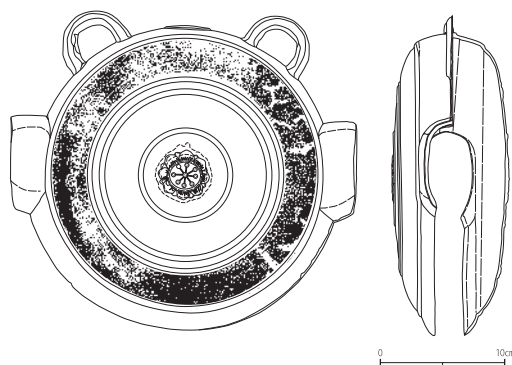
口唇部裏面には、「信州高遠領」「南福地竹松村中」と銘文が刻まれています。信州高遠領南福地竹松村は、現在の長野県伊那市富県にあたります。



## 鰐口

最大幅 27.8cm、厚さ 9.4cm の鰐口です。上方に、「耳」と呼ばれる懸垂用の環状が左右対称に 2 個付いています。また、左右中央には「目」と呼ばれる円形の突起がつけられています。下半部分は「口」と呼ばれる裂口があります。

撞座には間弁を有する単弁 8 葉蓮華文が表されています。銘帯には、上方に「奉納」その左右にそれぞれ「願主 [ ]」「慶應二丙寅歳一月吉日」と刻まれています。慶應 2 年は 1866 年にあたります。右側部分に刻まれる「願主」の続きは摩滅して読むことができません。



## 用語解説②

(『仏教考古学事典』参考)

### しょうこ 鉦鼓

鐘鼓・常古・鉦とも呼ばれています。青銅鑄造製で、表面は中央に向けてやや膨らみ、同心円の凸帯により、数圈に区分されています。上部の 2ヶ所には、ほぼ対象的な位置に紐を通す耳がついており、この耳の孔に紐を通して吊し、叩いて鳴らします。

鉦鼓は、元来は雅楽の打楽器として用いられ、仏教各派が迎講をはじめ、念仏用・勧進用などとして使用するようになったものです。

### ふせがね 伏鉦

叩鉦・扣鉦・敲鉦・チャンギリとも呼ばれています。鉦鼓から変形したものと考えられ、鉦鼓の凹面口縁に 3 本の脚を付しています。

鉦鼓が吊り下げて叩くのに対し、伏鉦は木台の上に置き、これを叩いて鳴らします。用途は、念仏・題目・御詠歌に合わせて拍子をとるために使用したものです。

### わにくち 鰐口

主に神社仏閣の軒先に懸けられており、前面に垂らされた緒といわれる布縄をふって鼓面を打ち礼拝をします。銅・鉄の鑄造品です。撞座には蓮華文が多くみられます。鰐口の大きさは、小型から大型のものまで様々ですが、一般的には径 20～30cm のものが多くあります。

## 梵鐘の製作工程

梵鐘は、<sup>いもし</sup>鑄物師と呼ばれる鑄工の職人によって製作されます。

梵鐘の製作は、まず外型と中子（中型）と呼ばれる鑄型を作ります。この鑄型は、真土と呼ばれる砂と粘土を主材料とした土に、鐘の半断面を模った挽板という型を回転させて鐘の型を成形します。成形後、外型は分けられ、型の内側に木型などを用いて龍頭や乳、撞座などを施文します。

外型と中子を合わせた後、溶解炉で溶かされた青銅（銅と錫、その他金属の合金）を型に流し込みます。冷却した後、外型と中子を外し、製品を取り出して、湯口に残った張りを切り取り磨き上げて完成します。

伝・榎原市出土鐘の復元鐘製作を担当された鑄物師小田部氏によると、現在は1つの梵鐘を製作するのに4ヶ月から半年、ものによっては1年かかることもあるそうです。



梵鐘の挽板



型・型抜き



外型



青銅の流し込み



龍頭木型（鎌倉時代）



龍頭は、梵鐘を釣るために設けられた部分です。環状で、左右に口を下に向けた龍と中央に宝珠が置かれています。

龍頭の木型は、表面に龍と宝珠の模様が彫られており、裏面は平らです。この型で2つの鑄型を作り、それを合わせて立体的な龍頭の鑄型ができあがります。



編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700 / TEL: 048-536-6150

発行日 平成27年11月2日

本紙は立正大学品川キャンパス展示解説パンフレットとして、池上悟（館長）の監修のもと池田奈緒子（非常勤学芸員）が編集した。

【表紙の写真】 1 伝榎原市出土鐘復元品、2 妙心寺鐘上帯撞座下帯拓影、3 長徳寺鐘、4 鱗口、5 半鐘、6 龍頭木型、7 清水寺鐘撞座銘文拓影、8 伝榎原市出土鐘